島根県
現代俳句協会会報
第46号
令和4年3月1日

私と俳句と湘子の教え

副会長　梅津博之

最近の私の俳句とのかかわりは、地元の六十七人の俳句会に参加させてもらっているぐらいです。

その私が最初に俳句と係わったのは半世紀も前のことで、地元にあった『鷹』の支部に寄せてもらったのが最初です。

その頃は『鷹』の創成期で益田からも「山崎正人」「寺田絵津子」という『鷹』創立当時からの同人がいて、私たちも機会があれば全国大会や、指導句会に参加させて頂いていました。指導句会は中国地区では各県が順番に開催していたように思います。指導句会では投句された全句について湘子先生が講評されるのが通例でした。

その中で今でも印象深く残っているものとして、兎に角、季語の重みのことを言っておられた様に思います。それと「季語は離しなさい」と言われました。又季語を修飾形容するのはよくないと。

最近、夏井いつき先生の「プレバト」で「季重なり」のことがありますが、あまりその話はなかったように思います。もともとそんな句はなかったのかもしれません。後、子どもの俳句は甘くなるからダメ、それから陳腐な言葉やマスコミが使っている言葉はいけない。例として寺社にまつわるもの、走り根、木洩れ日、轍、等々ありました。また「予定調和」「リズム」「山本山」「類想類句」「中八」といろいろありました。

それから当時の俳句ブームにあまりよくない思いもあった様で「お俳句会」ではいけないと、ですから単なる趣味の会のようなものではいけないとおっしゃっていました。

今思い起こすと、俳句を文芸・文学として純粋に追及しておられたのかなとも思います。また一時期起こった俳句についての第二芸術論に対する反感があったのかもしれません。

私たちを取り巻く様々な文化・芸術活動においても、どんどん新しいものが出てきているし、私一個人としてもこれまでの殻にとらわれない新しい表現方法と思っているところもあります。これまで先輩諸氏が培ってきた文学としての俳句を次の世代に継承していくことが私たちに課された命題と思い、今後とも精進してまいりたいと思います。

令和三年度　島根県現代俳句協会　総会の結果

（紙上審議の結果）

会員数　十七（令三・十・一現在）

返信数　十四

第一号議案

令和二年度　事業報告と決算報告

承認する　十四

承認しない　○

第二号議案

令和三年度　事業計画と予算（案）

承認する　十四

承認しない　○

第三号議案

役員改選について

承認する　十四

承認しない　○

その他の意見　特になし

第39回 中国地区現代俳句大会

令和三年六月一三日～一四日

鳥取市末広温泉町「白兎会館」

対馬康子先生を迎えて、鳥取市の「白兎会館」で開催が予定されていた第三九回中国地区現代俳句大会は、コロナウィルス感染防止対策のため、会場に集っての大会は取り止めとなり、紙上俳句大会として実施されました。

以下に、島根県関係者分を掲載します。

☆優秀賞

ふるさとの景は人肌水ぬるむ　黒崎　柊二

☆秀逸賞

啓蟄や空気のやうに老いており　月森　遊子

☆対馬康子賞

月に咲く花を見んとや紙飛行機　村上　和枝

寒雷や魚群のまなこ移りゆく　森田　廣

大会作品抄（順不同）

まほろばに住み笹鳴きを聴く余生　月森　遊子

鳥帰る五指より透ける日本海　村上　和枝

失せ物の淋しく見つかる梅雨の星　福田　玲子

雪の客地団駄踏んでから上がる　伊藤　晃彦

夜汽車待つ駅で春星拾いけり　柏谷　千惠

冬銀河生身にもどる流木たち　森田　廣

燻ってゐる木片燃え尽きた手紙　梅津　博之

手招かれ縁に集いし春落葉　安達美那子

春一番歯車やっと回り出す　黒崎　柊二

勉強会作品抄（順不同）

水平線の向こうは崖です苗木市　安達美那子

切り過ぎの髪気にしつつ春闘へ　福田　玲子

啓蟄や不要不急の野良仕事　黒崎　柊二

ふるさとは空家放棄田花こぶし　月森　遊子

身のうちの枯葉もろとも落葉焚　森田　廣

水滴の一つは春の雷となり　村上　和枝

白木蓮夜の帆船で空をゆく　柏谷　千惠

お知らせ

第40回 中国地区現代俳句大会

とき	令和4年6月12日(日)　10時～15時(1日)
ところ	倉敷アイビースクエア（岡山県倉敷市）
本部選者	久保純夫 先生（現代俳句協会副会長）
投句	大会句　2句 1口（何口でも可）
	投句料　1口 1,000円（投句に同封）
	勉強会　2句（勉強会に参加予定者）
締切	令和４年３月22日　必着

令和三年度 諸家作品抄

（五十音順　カ行より）

柏谷千惠

中海に二重虹立つ秋の朝
大きな月残して帰る花野かな
銀漢を渡れば鈴の音聞こゆ

黒崎柊二

文化の日とまとハウスでモーツァルト
しんみりと昭和にかえる温め酒
干し柿や老いては脇が甘くなる

黒崎李青二

裏白の山に分け入り神迎へ
職分の父娘（おやこ）の舞を歳の暮
新年やいつもの鳥の孤影あり

蹴衣

膨らむ柴犬秋麗の玄関
月光蕩けてごま油の滴
秋来るエミューの脚を畳ませて

月森遊子

短日の晩学とかく四捨五入
人も野も惚けて笑ふ冬日和
ふるさとを捨てし悔ふと冬すすき

野津あつし

村ひとつ闇に沈めて虫すだく
渡り鳥見し昂ぶりを持ち帰る
あいさつの中に深まる秋を識る

深田地絵

病廊をあふれて来るや銀杏黄葉
連山紅葉橋本病の友の声
茶の花や次の言の葉拾います

福田玲子

四、五百も玉ねぎ植えて冬に入る
バイオリン小刻みに泣くこぼれ萩
月食の空の明かるみ狐鳴く

村上和枝

脇道は脚長蜂のまっぴるま
空欄を埋める今年の曼殊沙華
茶の花や今日のことばは今日終る

目次翠静

秋の雲日影の島を押してゆく
手をつなぎ月探訪へ秋の雲
舞台移す幕を引きゆく冬夕焼

森田廣

かなしみは羽化を遂げけり黒葡萄
空と水の夕日相寄り鵙燃えぬ
左右（う）の耳抜ける川あり十三夜

安達美那子

銀杏黄葉の心音聞くや幹に掌を
小刻みに揺るる水面や雁渡る
コスモスと距離遠くして上り汽車

伊藤晃彦

小鳥来て鳴くお婆さんよく笑ふ
猫の毛繕ひ勤労感謝の日
天になほ青さ残れり冬芒

梅津博之

おそろしく他人行儀な白菜よ
澱（おり）となり沈みし過去の初時雨
甜瓜（まくわ）どすんと嘘のばれにけり

「現代俳句」抜粋

令和3年3月号から
令和4年2月号まで

列島春秋

どこまでが出雲の空や辛夷咲く　森田　廣
夜桜を灯して人が消えてゆく　柏谷　千惠
満艦飾気合ひ不乱の櫂さばき　太田　亮
人影を待つ出雲野の大代田　伊藤　晃彦
鷺舞の羽根より京の風立ちぬ　梅津　博之
舟虫や賽の河原の潜戸洞　月森　遊子
八雲忌や石狐のまとふ風の色　黒崎李青二
秋蝶の言葉少なし奥出雲　村上　和枝
冬鶯に訛ありけりぼてぼて茶　月森　遊子
冬夕日大宍道湖に横たわる　福田　玲子
白魚の群や透きつつ曇りつつ　福田　玲子
立春の宍道湖軽い息遣い　黒崎　柊二

現代俳句の風

鳥雲にわれとわが身を紙吹雪　森田　廣
炎昼のわけても錐を揉むおとこ　森田　廣
疫神の手足食み出てハンモック　伊藤　晃彦
少年期ひもどく麦の一穂手に　月森　遊子
独りなら紫ゆるす芒原　森田　廣
魚屋の隣に肉屋秋うらら　伊藤　晃彦
土に還る人の道なり草紅葉　月森　遊子
冬月や生身にもどる流木たち　森田　廣
地域限定木枯一号が来るぞ　伊藤　晃彦
移り気は空にもありて冬木の芽　月森　遊子

シリーズ薄墨桜（俳句と絵画）

森田　廣

こだま生む鬼のうぶごえ芒原
大銀杏いくたび母を降らすのか
冬帽を目深に父は沖を読む

「現代俳句年鑑2021」を読む

感銘の一句　馬場民代

梅雨明けの出刃より海を研ぎ出しぬ　月森　遊子

30年 永年会員記念作品

永らえて席を賜る菊日和　月森　遊子

会報他受贈深謝

各地区、各県より会報等贈呈いただき、ありがたくお礼申し上げます

あとがき

節分そして立春が過ぎて暦の上では春。庭の牡丹の芽が赤く膨らみ始めました。

世を騒がせている新型コロナウィルスの感染が始まって早や二年余り。昨年末ごろはやや収まる気配でしたが、年明け早々から、オミクロン株による第6波とか言われる爆発的な感染拡大。多くの都道府県で過去最多の感染者数を記録しました。

収束など期待せずに、コロナと上手に付き合う方法を考えなければならないかも。

今年も一堂に会しての俳句会とか吟行句会とかの開催がためらわれる情勢が続くことと思いますが、諸兄・諸姉にはご自愛とご健吟をお祈りします。

（柊二）

島根県現代俳句協会会報　第46号
令和４年３月１日発行

発行人　月森　遊子

発行所　島根県現代俳句協会
〒690－0033
松江市大庭町356－５

事務局　黒崎　柊二
〒690－0855
松江市浜佐田町926
電話・FAX
0852－36－8639